103

特249

667

歐洲の危機を孕む

スペインの内亂

第二次世界大戰一歩前

大阪毎日新聞社
東京日日新聞社

定價十錢

始

特249
667

大阪毎日新聞
外國通信部長
上原虎重著

歐洲の危機を孕む
スペインの内亂

第二次世界大戰一歩前

大阪毎日新聞社・東京日日新聞社

斜線は革命軍占領地域と目されるもの
●は革命軍占領都市
○は政府軍の支配下にある都市
×は激戦地

目次

右が勝てば軍部獨裁、左なら赤一色……三
天下取り數ヶ月、自潰作用の民衆戰線……六
爆發直前の諸勢力分野……一〇
國民から遊離した特殊階級〝軍隊〟……一四
軍隊と勞働者の對立爆發……一八
二大陣營の死鬪同胞殺戮の慘……二二
歐洲列强が踏む危きステップ……二六
スペイン内亂を繞る歐洲政局……三一

緩慢なる爆發……四三
スペイン内亂日誌抄……四三

歐洲の危機を孕む

スペインの内亂

第二次世界大戰一歩前

右が勝てば軍部獨裁、左なら赤一色

一九二二年モスクワに開かれた國際共産黨大會でレーニンは「ソヴイエト・ロシヤについで革命の赤旗を飜す最初の國はスペインであらう」といつて、滅多のことに驚かない赤い代表達者をして一驚を喫せしめた。だが氷のようなひやゝかな頭の持主であるレーニンは、相當の理由があつてこの豫言をしたのだ。第一に當時のスペインと革命前の露國とは國情において甚だ似通つてゐた、全人口の六割まで目に一丁字のないスペイン人は貧困と迷信のうちに生存する。しかるに貴族、大地主、豪商、僧侶の類は豪奢きはまる生活をする。第二にはアブデル・クリムに率ゐられるモロツコのベルベル族の叛亂は案外手堅く年を重ねて鎭定に至らない、そのためにアルフオンソ十三世の王座を支へる力、即ち武力は蝕まれるように衰へて行く、赤い革命が芽ばえ、かつ成長すべき條件は完備してゐるといふのである。ところがその翌年の一九二三年にはプリモ・ド・リヴエラ將軍の獨裁政權が樹立され、レーニンの豫言は無殘にも裏

切られた。リヴェラ將軍は、一九二九年に辭職し、ベレングエル將軍が代つたりしたが一九三一年四月國王が亡命し、ブールボン・アンジュー王朝が覆るまで獨裁制は足掛け九年も續いたのである。しかも國王に代つて大統統をついだものは自由共和主義のアルカラ・サモラ氏で桃色にもおよばない共和政權がうち立てられた。もつとも王朝覆滅を合圖に、ストライキや寺院燒打は左翼分子によつて頻々と行はれたが、これらは共和政府の手で容赦なく彈壓された。かくて一九三三年の總選擧に右翼が大勝するにおよんで彈壓は一層峻嚴となりつひに翌年十月の左翼革命となつた。極左分子はもとより自暴自棄の極、死鬪の覺悟をもつて爆發しただけにその抵抗は頑强なものであつたが、勝ち誇つた政府軍および警官の鎭定ぶりは凄慘を極め、殊に北部アストリヤス地方の慘狀は正視するに堪へないものがあつた。右翼の牛耳るところとなつた政府は、大殺戮をもつて足れりとせず、三萬の極左分子を獄に投じ、ほとんど獨裁政治の實を擧げるの概があつた。しかし左翼の運動は獄內獄外相呼應して進められ、（スペインの政治犯人は頗る寬大な待遇をうけるのである）本年二月の總選擧前には佛國の例にならひ左翼の大同團結フレンテ・ポプラールが結成された。選擧の結果は左への大雪崩となり、あはや十四

年前のレーニンの豫言が實現されるかに見えた。そこへ突として今度の軍部革命が勃發した。左が勝てばスペインは直に赤色に塗られるであらう。右が勝てば烈々たる軍部の獨裁が確立されるであらう。スペインの運命は今槓杆の一端に戰いてゐる。

去る七月十三日、王黨の首領カルボ・ソテロ氏は突擊警官隊員に拉致されて白晝マドリツドの郊外で慘殺された。數日前何者かに（恐らくは右派の連中に）暗殺された同隊のホゼ・カスチロ中尉の復讐と目された。カスチロ中尉の暗殺はそれ以前の暗殺に報ゆるもので、ヴエンデツタの因果は繩をほぐすように際限なく溯れるが、ソテロ氏の虐殺に至つてはじめて政界の一枚看板は左右兩極の最後的決鬪の血祭にあげられたのだ。すでに騷然たる國情はこゝにおいて一氣に破裂點にまでおしやられた、王黨とその別働隊たる軍隊の大部分は立ちどころに挑戰に應じた、打倒共和制の叫びは擧げられ、アサーニヤ內閣の軍隊改造で遠くカナリー島に左遷されたフランコ將軍はモロツコに飛來し革命の火蓋を切つた、各地の兵營は響に應じて起つた。

天下取り數ケ月、自潰作用の民衆戰線

スペインの王黨首領ソテロ氏は暗殺される前の日、即ち七月十二日に「一度君の號令が下れば政權は君のものではないか、一直線に進み給へ」と說きすゝめる政友に答へて「あせることはない、政權は自然に私の掌中に落ちて來ようではないか」といつたさうである。革命勃發前の國情から推してソテロ氏の豫想は一理あつたと思ふ。本年二月の總選擧に當つて左翼の諸黨派は民衆戰線を張り、共同政綱を掲げて右翼征伐に成功はしたが、いよ〳〵政權が彼らに歸し共同政綱を實際化する段になつて足なみは亂れた。黨派別や主張についてはあとから略述するが、元來彼らの共同政綱なるものは、各派の主張を綜合濾過したものでなく、ファッシズムの擡頭を抑へるだけの目的をもつて大同團結を行つた各派が勝手な主張をもち寄つて一個の政綱として書き上げたものに過ぎないのであつて、これを全面的に實行するは不可能である。殊に極左の連中は直接モスクワの指令を仰ぐ正統共產黨も、その他の過激な勞働組合も社會黨な

どと提携したのは全くファッシズムに對抗する一時の戰術であつて、首尾よく選擧に勝つた上は政權に參加せず、閣外より政府を脅かして自己の主張貫徹をはかるのである。佛國における民衆戰線の場合も、同斷であるが、それは彼らが政權に參與して責任を分擔するを厭ふといふよりも、右派を沈默させた後の彼等の敵は實に社會黨そのものだからである。ゆゑに足並の亂れるは、當然であつて、スペインの民衆戰線は天下を取つて數ケ月の間に早くも自潰作用をはじめたのである。そこで秩序を欲し無產階級の獨裁に反對する國民のある部分が新政權に愛想をつかす時が來る。それが王黨や保守黨の乘ずべき時である。しかもかうした狀態は目に見えて迫つてゐた。ソテロ氏の豫想は一理あつた、身を衞る上に用意を缺いだだけのことだ。

ところが、ソテロ氏の見透しに間然するところがなかつたかどうかを疑はねばならぬわけがある。それは機の熟するのを待つものが他にも一人ゐたことだ、勞働者總合同（ゼネラル・ユニオン・オヴ・ワーカーズ）の幹事長ラルゴ・カバレロ氏である。頭のツル〳〵に禿げた小男で以前左官職だつたといふカバレロ氏は、四十七歲で殺されたソテロ氏よりは遙かに年長の六十六歲であるが、淺黃色の眼光烱々、全身火のような熱血漢である。彼は組合員三百萬と號

し、スペインにおける最大勞働團體を誇る前記總合同のリーダーとして、一呼すればゼネストをもつてスペイン全土を麻痺せしめる實力をもつゝもに、社會主義義勇兵のリーダーでもあるのだ。公式には勞働者總合同は社會黨の一翼をなすものであるが、穩健なプリエト氏に率ゐられる正統社會黨はこの連中から見れば微温派として輕蔑すべきもので、革命前における兩者の間柄は互に狙撃し合ふ程度の親密さであつた。しからばカバレロ氏はどんな主張をもつてゐるかといふと「アサーニヤはケーレンスキーだ、おれはレーニンなのだ」と嘯いたり、「我々は社會主義者と稱してゐるが、共產主義者と變りはないんだよ」など、くすぐつたさうに笑つたりする彼の主張はコンミュニズムにほかならないのだが、具體的にいふと、國家の資源は悉く國有とする、農園の共同經營（露國のコルホーズに當る）勞働者の工場管理、勞兵主義、大綱を擧げるとザツとこんな風である。然るにアサーニヤ氏によつて代表される共和政權は、自作農を殖やすことによつて社會的安定を見出さうとし、捨てられたような大地主の土地五十萬エーカーを沒收し、七萬の貧農に分與したりしたがカバレロ氏はせゝら笑ひ「まるで盲腸炎患者に一錠のアスピリンをのませるようなものだ、大仕掛にやらねば國民は助からない、もしそ

れが合法的に出來ないならばわれ〳〵は別の手段で實行するだけだ」アサーニヤ大統領の下に初代首相となつたキロガ氏は、如何ようにもして民衆戰線の形を崩さずに時局を導かうとしたが「別の手段」の一部分であるストライキは次から次へと續出し、カバレロ派よりもさらに矯激の分子が横行して寺院の燒打、僧尼の虐待などが行はれ、それを政府が取締れないに至つて共和政權の命脈は日とともに縮んで行く、しかし共和政府を使へるだけ使つてゆかう、ケーレンスキーが倒れたら自分がレーニンになりさへすればよいのだと高をくゝつたカバレロ氏は、にはかに事態を破裂點にもつて行くにはあたらない、それに現政府の軍部改造が中道にある今日、カバレロ氏といへども軍隊を向うに廻して決戰し得る自信もなかつたと思ふ。しからば何ゆゑにソテロ氏を屠つて一擧に革命を誘發したか、そも〳〵何者が屠つたか、下手人が突擊警官隊員の制服を着てゐたといふだけでは眞相は說明されない。だがこの謎については前大統領サモラ氏の名まで引合に出され、いろ〳〵に想像されてゐるが、當分は解かれないであらう。われ〳〵としては單に革命前の形勢が以上の如きものであつたとしておきたい。

爆發直前の諸勢力分野

革命の情景を描く順序となつたが、内亂の分野について一應の概念を得るためにこの邊で諸勢力の鳥瞰圖を挿入しよう。

まづ政治的勢力を一見するとして、何しろ二十七もの政黨政派が林立する有樣なので、微細な點になると到底區別がつかないし、またつける必要もないと思ふから、二月の總選擧の結果を右翼百三十五議席、中央六十五、左翼二百六十三と大まかに分類して、その中の重なるものについて右から左の順に略述する。

ファッシスト　故リヴエラ獨裁官の子息エステラ侯ホゼ・アントニオ・プリモ・ド・リヴエラを首領とする民衆戰線と不俱戴天の間柄にあるはいふまでもなく、三月解散を命ぜられついで五月首領が叛逆罪をもつて投獄されたまゝ今日に至つてゐる。潛行的勢力は強大といへないが、革命の一動力とされてゐる。

王黨　ソテロ氏によつて率ゐられたもの。總選擧で三十五、六の議席を戰ひ取つたが首領の暗殺に抗議して議院を去つてしまつた。前國王アルフオンソ十三世はチエコスロヴアキヤあたりから否定してゐるけれども、この黨が革命の醸成に關係してゐることは疑ふ餘地なしとされてゐる。

スペイン右翼自治聯盟　左翼合同と對立する反對黨の本隊である。ローマン・カソリツク民衆行動黨といふ仰々しい名をもつ政黨の首領ヒル・ロブレス氏を中心として集合した右翼の聯合團體である。構成分子は地主、寺院、中流階級といふ譯で共和政權から打擊をうけ、從つて怨みをいだくものである。革命にどこまで參加してゐるかは分明を缺くが、ロブレス氏がソテロ氏同樣左の暗殺隊にマークされてゐることを知つて、革命勃發の十七日夜佛國に遁れたところを見ると相當のものらしい。

中央穩健派　レルー氏の率ゐる急進黨および急進共和黨など、一九三三年右翼の大勝以後その手先として使はれ、レルー氏のごときは數回に亘つて首相の印綬を帶びたりしたが、元來灰色的存在なので勢ひの赴くところ左右兩極がすさまじい牽引力を發揮するにおよんで、

總選擧で散々に打ちのめされ、レルー氏は七十七歳の高齢をもつて革命の前夜ポルトガルに亡命した。

左翼戦線　アサーニヤ氏の左翼共和黨、社會黨、共産黨、サンヂカリスト等々雜多な團體の集合である。共和黨は佛國民衆戦線における急進社會黨に似た地位を占め、左右が衝突する場合、中央黨についでヂレンマに陥るもので格別論ずる要を見ない。説明を要するのは議院の第一黨を誇る社會黨だ。前に述べた通りプリエト氏の穏健社會黨とカバレロ氏の革命社會黨との寄合世帯であるが、最近プリエト派は猛烈なカバレロ派のために著しく押詰められ、革命直前の黨大會などでもプリエト氏はすんでのことにリンチを受けようとし、警官隊に護衛されつゝ辛くも退場することを得たほどである。革命以來彼の名は沓として傳はらないが大敵を目前に控へ、やむなくカバレロ氏に降つたのかも知れない。

次は共産黨だが不思議なことに共産黨もスペインではいくつかに分れてゐる。正式に第三インターナショナル幹事長スターリン氏の指令を仰ぐ共産黨が五萬五千ほどの黨員を擁して存在するほかに、最近まで相對立するマルキシスト派とトロツキー派の二團體があり、それが現在合

併して「合同マルキシスト」と稱し一萬五千の黨員をもつてゐる。赤化でもしようといふスペインの共産黨が、かくの如く零々たる勢力であるのは一見奇妙のようでもあるが、それは共産黨と區別のつかない革命社會黨のために當然黨員たるべきものを浚つて行かれる上に、最も破壞性に富む分子はサンヂカリスト、アナーキストなどと稱して別居してゐるからである。サンヂカリストは國民勞働聯合（ナショナル・フエデレーション・オブ・レーバー）を組織し、議會に二名の代議士を送つてゐるので政治的勢力として取扱つたが實は尨然たる革命的社會勢力で、組合員百五十萬を算し、數において勞働者總合同に一籌を輸すも、獰猛性においては優るとも劣らない團體なのだ。アナーキストに至つては議會政治に無關係であるが通常アナーコ・サンヂカリストと呼ばれ、双生兒の觀を呈してゐるからついでに書いて置く。この二團體は常に行動をともにするばかりでなくサンヂカリストはアナーキストと思へばよいといふことになつてゐるくらゐで、その兇暴さは思ひやられる。然るにこの爆發分子は去る五月サラゴッサの大會において、從來犬猿の間柄にある勞働者總合同と提携してスペインの赤化をはかる旨を決議し、その結果として革命同盟なるものが生れてゐる。今度の革命に際して叛軍を相手に、

月餘にわたつて惡鬪しつゝある無產階級の義勇兵は革命同盟に屬してゐると思へばよい。新聞電報が以上の極左大團體を一括して共產主義者と呼んでゐるのは、單にファッシズムに對するコンミュニズムの意味で、便宜上の呼稱を用ふるにほかならない。いはゆる共產黨のごときは巨人の周圍を奔走し犬馬の勞をとりつゝあることだらう。次ぎは軍隊だ。

國民から游離した特殊階級「軍隊」

近代スペインの文豪イバニエスはその著「假面を剝がれたアルフオンソ十三世」のうちにこんなことを書いてゐる。

今日われ〳〵が軍隊といへば、それは武裝した國民、國家の生命と理想のために戰ふ一國の市民、階級の如何にかゝはらず惡と信ずるものに對して、善と信ずるものを衛ることによつて第一義的責任を果すところの團結された戰士を意味するのに、スペインで軍隊といへば特定の階級（カスト十八世紀中プロシヤの諸王が組織しようと試みたものに酷似する特殊階級

を意味することゝなる、國民に兵役の義務はあるが、それは將校にあらざる男子市民にだけ適用されるに過ぎない。將校には軍人を職業とするもののみがなれるので、訓練のごときは幾何も要らない、こんな風だから國民が全體として軍事の樞機から遠ざけられるは當然である。さらに將校どもが自分自身を國民と共通するところのない特殊的存在であると考へるようになるのは一層當然である、一言にしていへばスペインの軍隊は國民の代表者にあらず、王家にのみ仕へる軍隊、古ローマ皇帝の近衛兵の類である。

イバニエスはアルフオンソ十三世の仇敵で、故國に住めず佛國に客死したほどの人物であるから軍隊を論じても、あるひは必要以上に峻烈かも知れないが、われ〳〵はこの軍隊觀から感情をマイナスして一應の概念を得ておけばよい。

ところが王政の末期には政治が大に腐敗してゐた。政治家が事に堪へなくなつて軍人が政界に乘出す例は世上いくらもあるが、スペインはその顯著な一例で、カタロニヤの總督であつたリヴエラ將軍は、マドリツドの腐敗見るに忍びずとして一九二三年バルセロナから乘込んで獨裁政治を布いた。イタリーのファッシズムなどに比較すれば非常に寬容なものであつたが、個

人主義の旺盛なスペイン人は痛くこれを憎み、果ては國王が贊成したのが惡いといふので國王をも怨むに至り、一九三一年にはさしも人氣のあつた國王が亡命せねばならぬほどの事態となつた。共和制樹立後、アサーニヤ首相（現大統領）は軍隊の「共和」化を焦眉の急とし、二年ばかりの間に勤王將校數千名を免官したが、容易に理想的軍隊は得られなかつた。それは庶民に文盲が多かつたり、騎士の傳統が多分に殘つてゐる國柄であつたりして、將校はほとんど全部上流の出身であり、この階級は共和制によつて失ひこそすれ、恩澤に浴することの薄い階級なので、アサーニヤ氏の志望は短日月の間に達せられるはずはなかつた。そのうちに右翼が勢力を盛返し氏自身が下野するにおよんで軍隊、少くとも將校は昔に還つてしまつた。今春氏は再び首相となるとともにまたも軍隊の改造に着手し、一九三四年の左翼革命を鎭定した際あまりに殘虐を逞しうしたとの理由その他で千數百名の將校を却けたのを手初めに、金持の子弟が六百圓、三百圓といふ小額の金を拂ふことによつて兵役年限を短縮し得る制度を廢するなど鋭意改造に進みつゝあつたが、わづかに事業が緒についたところで革命となつたのである、といふよりは軍隊改造の脅威を感じ、對抗策を講じつゝあつた軍閥が、左翼政權のもとに無政府狀

態が彌漫するを見て、秩序回復といふ絶好の口實を得て革命を敢行したと見る方が當つてゐるかも知れない。それはとも角として、フランコ將軍の一聲によつて全軍隊の忠誠は右と左に分れた、忽ち大統領令は下つて、第一軍管區（首府所在地）の司令官兼陸軍の巡閲官カバネリヤス將軍、カナリー島總督フランコ將軍、ナバレ總督モラ將軍以下三千の將校は却けられた、そして政府に忠實な部隊の指揮をばなるべく庶民の出である下士をして取らせ、俄仕立の準民衆軍隊をもつて革命軍の鋭鋒に當ることゝはなつたのである。

ついでに說明しておきたいのは、モロツコから本國に押渡つた軍隊である。これが三種類に分れる。一つはスペイン人から成るもので本國同樣、他の二つは外人兵團（テルチヨ）と土人兵團（レグラレス）とである。前者は六千名、後者は九千二百名、ともに一九二六年アブデル・クリムの亂が鎭定された時に創設された部隊である。外人兵團は世界中のアブレもの、また冒險兒を構成分子とし兇暴比なく、土人兵團はこの地方に住むベルベル族をもつて編成されてをり、族長クリムに率ゐられて天險によつたせゐもあるが、五年間も大きなスペインを惱ましただけあつて、有名な慓悍士族である。兩者ともドンコサツクのように農業に從事しつゝ自治

部落をなして駐屯し、政府からは新式武器が供給されるので恐ろしく精鋭な戰鬪單位とされてゐる。革命早々フランコ將軍にインタヴューした佛國の一記者の、何ゆゑ土人兵を本國に差向けたかとの質問に答へて、將軍は「早く片づけたいからだ」と簡單にいつてゐるが、彼等がアルゼシラス邊から上陸して北進するや、一電報は「目を遮るものすべてを倒して進みつゝあり」と報じた。かくの如き部隊を引きうける本國人は軍隊も民兵もつらいかなである。

軍隊と勞働者の對立爆發

革命の第一聲はモロッコの一邑メリラに揚つた。七月十七日の夜である、一映畫館で一九三四年十月の革命鎭定のフィルムが上演された。なにゆゑかゝる挑發的なものを公開したか、右翼の殘虐を民衆に示す目的であつたかどうか、二月以來逐日險惡の度を深めつゝあつた軍隊と勞働者との關係はこゝにおいて破裂した。民衆は怒號し、大擧入場してゐた外人兵はこれに應じ忽ち亂鬪となつた、鬪爭は街頭に溢れ出た、土人兵も擧つて山をおりて參加した、騷擾は疾

風の勢ひをもつて駐屯軍の本營スータに擴がつた、ソレと一萬八千人（駐屯軍は全部で三萬五千人）がアルヘシラスとカーヂスを目ざして海を渡る、本國の兵營もセヴイラ、マラガ、サンセバスチヤン、ブルゴス、パンプロナ、サラゴツサ、バルセロナ等々一齊に蜂起し、至るところ同胞相戮の市街戰は展開された。十九日セヴイラ放送局はフランコ將軍から守將リヤノ將軍のもとに達した檄文を放送した、いはく

余はテツーアン（モロッコ）において光輝ある愛國的軍隊の指揮をとるに當り、スペイン、モロッコ全體の忠誠なる兵營に熱烈なる敬意を送る、スペインは救はれたり！　アンダルシヤ、ヴアレンシヤ、パリヤドリッド、ブルゴス、アラゴンの諸州ならびにカナリー群島、バレヤリック群島は文武を擧げてわれ等に合體せり、ひとりマドリッドのみは例外をなし軍用飛行機を用ひて防禦なき市邑を爆擊し、無辜の婦女子を慘殺しつゝあり、やがて彼等の罰せらるべき時は來る、吾等は必ず清算を求めんとす、今日に至るも首鼠兩端を持するものに對してもまた同じ、無智にして吾等に遠ざかるものは急がされば大義に參加する機會を逸することを知れ、祖國は命ず、確信をもつて邁進せん

北軍の司令官モラ將軍は新聞記者の質問に答へて、革命を急いだのは政府に機先を制されるおそれがあつたからだといつてゐる。ソテロ氏の死によつて多少時機が早められたらしいが、さすがはプロフエツショナルである。一たび發するや一糸亂れず、忽ち政府は四面楚歌のうちに陷り、周章狼狽、カバレロ氏を閣議に招いた。彼はすでにゼネ・ストを宣してゐた、内閣はそれを認め、彼の協力を懇請した。ゼネ・ストを承認する内閣など前代未聞の沙汰といふべきだが、半身不隨の内閣としては背に腹は代へられなかつたか。カバレロ氏は懇請を容れて配下のプロレタリヤツトを繰出した。鑛夫は坑道を出で、職工は工場を出で、農夫は鋤を棄てゝ首府に蝟集した。彼等は間に合せの得物をとつてマドリツドの守備についた、それが十九日のことである。越えて廿一日には數千の無産義勇兵は最新式の武器を與へられてアンダルシヤ、ヴアレンシヤ、サラゴツサ等に向けて送られた。ついで首府には赤色委員會なるものが設けられた。政府が瓦解した場合政權の讓渡を受けるためであり、カバレロ氏の方寸から出たことはいふまでもなからう。

こゝにおいて赤色政權の妖怪は西南ヨーロツパの上空に屹として現れた、妖怪の精は人と化

し、扇形陣地を縫つて活躍する、それが無産女戰士なのだ。彼女らは女工群から輩出する、數においてこそ遠く男子におよばないが、みづから銃を取つて戰ふのみならず、男子激勵の役目を演ずる點において恐るべき威力を揮つてゐる。彼女らの先祖は遠くフランス革命の女性市民の間に發見されるのであらうが、直接の生みの親は一昨年左翼革命の際、アストリヤスの首都オヴイエドで官軍に銃殺された少女アイダ・ラフエンテだ。妙齡十七歳の彼女は若いプロレタリヤツトの一隊を指揮しつゝ、十日にわたつて官軍と惡戰苦鬪をつゞけたのである。彼女の纏つた衣服はいくつもの穴があいたまゝ兩親によつてモスクワに送られ、今なほ革命博物館に陳列されてゐるといふ。この女戰士から靈感をうける今の女軍は、革命勃發とともに登場したものでなく「直接行動娘」と呼ばれて早くから活動してゐる。活動の範圍は主として寺院、修道院、尼寺などの燒打であつた、革命の空氣を吸つて成長し、古いものといへば一切かなぐり棄てた極端に「自由」な彼女等であるが、最も憎むところは宗教と、それに附帶するもの全部、わけても尼僧で、その憎惡の程度は見ないものには想像がつかないといふ。だから燒打のあるところ必ず石油罐を取扱ふ彼女らの姿を見るといふわけで、石油娘などとも綽名されてゐたも

のだが、革命となつて彼女らは完全に武裝され、首府の護りは勿論、東西南北いづれの戰線でも無產義勇兵の戰ふところ必ず彼女らが參加してゐるのである。

二大陣營の死鬪同胞殺戮の慘

スペインの運命を賭けた決戰はかくの如くにして遂に開かれた。當然の破綻が遂に白日の下に曝されたのだ。一九三一年の革命を遂行した共和主義勢力は中庸を得んとして失敗した。王朝を廢したことによつて舊支配階級を敵に廻した彼等は、思ひきつた社會的、經濟的改革を斷行せずして極左勢力の支持をも得られなかつた、そして左右の挾擊に苦しめられつゝ蹌踉として五ケ年を經過したのであるが、それは左右兩極の大衝突までの過渡期に過ぎなかつた。今や全國の分野は穩健共和主義を境として思想的に眞二つに斷たれた、軍隊も海軍も空軍もこれに準じて兩斷された、白から赤に連なる色彩のニュアンスなど一朝にして抹殺され、二千四百萬の國民は端的にファッシズムとコンミュニズムの二大陣營にたち分れて死鬪に從事することに

なつた。殺さざれば殺される立場の今のスペイン人には、同胞といふがごとき觀念は何等の牽制力もない、複雜な國際情勢の下に精鋭な武器をもつてフランス大革命が再演されてゐると思へばよい。

然らば實際戰鬪に參加しつゝあるものは一體どのくらゐあるかといふに、平時におけるこの國の兵力は將校一萬三千名、下士卒十四萬となつてをり、それが双方に分れて主力部隊をなしてゐるに相違ないが、政府はしきりに豫備兵を動員しつゝあるから正規軍の兵力は相當增加してゐるとともに、政府軍には赤の上衣にカーキ色のパンタロンを一着する女戰士を含んだ無產義勇兵がゐる、員數は發表されないが數萬に上るであらう。革命軍においても武器の許すかぎり農民に武裝を施すほか、モロッコにおいて續々土族を徵集してゐるから餘ほどの兵力をもつものとせねばならぬ、この雜然たる種類の戰鬪員が一大戰線を形づくらず、隨所に扇形陣地をつくつて狂熱をもつて殺し合ふのであるから、スペインは文字通り修羅の巷と化した次第で、犧牲者の數など大したものであらうと思はれる。平靜々々と當局によつて放送されたマドリッドにおいてさへ、政府の發表によると革命勃發後十日間に死傷千名とある。これは大規模に虐

殺の行はれたことを物語るものであり、内輪に見積らうとする政府の數字に過ぎない。バルセロナの如きも七月十九日の騒擾で死傷三千五百、さしもスペイン第一の商工業の都は大風一過廢墟のごとしと報ぜられた。その他凄慘な爭奪戰の繰返された地方の死傷はどうであらう、今のところ死傷算なしとして置かう。

そこで革命軍はどういふ作戰によつてゐるかといふと、革命早々モラ將軍が新聞記者に語つてゐる「われ〳〵はマドリッドに進軍しようと思へば何時でも出來るけれども、それは多量の血を流すを免れないので首府は糧食攻めにするつもりである」と。これは今なほ動かない作戰らしいが、義勇兵が恐ろしく善戰する點より見て、將軍のいふが如く革命軍の首府侵入が意のまゝであるかどうかは一個の疑問である。たゞいつかは内亂がをさまらねばならぬとして、如何なる終局を見るであらうかといふのが最も重要な問題である、しかもこれが甚だむつかしい、こゝでは外國の干渉がないものとして考を進めるが、戰況が現在のまゝで推移すれば早晩革命軍が戰鬪に勝つのではないかと思ふ。しかしながら本當の困難は勝つた後に來る、革命軍は七月廿四日モラ將軍の本據ブルゴスに臨時政府フンタ・デフエンサ・ナショナル（國防委員會）

を設けて、陸軍の耆宿カバネリヤス將軍を首班に推し、確信をもつて右翼の政權回復に進んでゐるが、前途に横はる事業の困難は到底一九二三年リヴェラ將軍が獨裁權を立てた時とは比較にならない。當時のスペイン人は睡つてゐないまでも悠長なものであつた上に、爭ひは主として軍閥と政治家との間にあつた、しかも政治家は腐敗し大體において腰拔けであつた、だからリヴェラ將軍が白馬銀鞍で揚々首府に乘込むや彼の節度は易々として奉ぜられた。今日は違ふ、第一にイッシューが右と左の間にあり、しかも王朝顚覆で血をすゝつた野獸のごとき無產階級は激しく階級思想に目覺めてゐるのである。假りに革命軍が勝つて各地の戰線が敗れたとする、その後に來るものは何であるか、無產義勇兵その他の掃蕩であり、手負ひ猪のような彼等のデスペレートな反噬でなければならない。即ちテロ時代の出現にほかならない、凄慘の點からいへば現在の内亂は單なる序曲に過ぎないであらう。飜つて政府軍が勝つた場合を想像すればどうか、革命鎭定に大功ある勞働階級の鼻息は到底アサーニヤ政權などによつてくじかれることはあるまい、第一彼等に與へた武器を如何にして取上げることが出來るか、彼等が赤色政權樹立にむかつて驀進するは明かである。フランス革命を論ずるものはいふ、革命は人によつて釀

成され、人によつて率ゐられるが、それは初期のことで、成長した革命は一個の怪物と化して人を制し、人を驅る、こゝに至つて人間は全くその飜弄するところとなり、一轉してテルミドールを出現すると。スペインの將來はこの恐るべき可能性を孕むものといはねばならぬ、然らばもしも國外から干渉が加はつたらばどうか。

歐洲列强が踏む危きステップ

外國の干渉といつても性質と程度が一通りでない。危機を包藏するヨーロッパのことである、一國でもスペインに對して武力干渉に出るものがあれば忽ち全歐の大亂となるであらう。しかしこの種の干渉は目下問題になつてゐないから、佛國が音頭をとつてしきりに成立に奔走しつつある武器、軍需品の供給に關する不干渉協定を檢討することにしよう。結論から先きにいふが、よしかような協定が出來ても徹底的履行は期し難い。といふのは、協定案の內容が不備である以外に、事柄全體と佛國の立場とに無理があるからである。何度もいつたことだが、スペイ

ンの革命はファッシズムとコンミュニズムの爭覇戰である。しかるにヨーロッパ全體は今日大體において右の國と左の國との二大集團にわかれてゐる。スペインにおける左右の衝突がこれを背景としないわけに行かない。いひ換へれば、右の二大集團はスペインの內亂を傍觀することが出來ない。それには主義以外に國家の威信といふ抽象的理由もあらう。現實的な利害關係もあらうが、いづれにするも對岸の火災とするわけに行かぬ。ローマのテヴェレ紙が七月二十六日の社說で

佛國の軍需品がスペインの國境を越えた事實は、兩國間の國境が消滅し黨派の境界線がこれに代つたことを意味する。その結果として、爭鬪は國家の間でなく、國家主義と國際主義との間に戰はれることになる、もしこれが現下の爭點であるならば、何人がスペインの事變を拱手傍觀し得ようぞ

と論じたのはファッシスト側の强い意思表示であつた。轉じて反對側を見るに、佛國勞働總聯盟の幹事長ジューオ氏は八月初頭「スペインの形勢に直面して良心ある勞働者にとつて中立などはあり得ない。スペイン勞働者の敗北は佛國勞働者の敗北である」と演說してゐる。共產

主義とは遠い信條をもつ氏にしてすでにしかり、モスクワの態度など思ひ半ばに過ぎるであらう。つまり列國のある程度の干渉はこれを制止する法がないのである。それから佛國の立場に無理があるといふのは、そも〳〵革命が起つて武器、軍需品による干渉を最初にやつた國は佛國そのものである。七月末の閣議において、空相コット氏は極力マドリッド政府援助を主張し、ブルーム首相、デルボス外相らの力で、辛うじてこれを抑へ、不干渉の方針を決めたが、それが國内で遵守されたかどうか、コット空相自身、國人救出のためマドリッドに派遣した飛行機(臺數をいはず)は、政府に徴發されたといひ、しかもそれが軍用に供されたことを否定してゐないのである。さらに革命以來、八月三日まで四回にわたつてスペイン政府の飛行機は金塊を佛國に運んでゐる。佛國新聞がその都度報道してゐることで全額は百萬ポンドに達する、軍需品など購入の目的であるはこれまた報道されてゐるところである。たゞ何が購入され、如何にして輸送したかゞ報ぜられてゐないだけである。さらに佛國には、現政府ともに、民衆戰線を張るところの共産黨があつて、八月はじめモスクワから飛來した代表者と謀り、義勇兵を募つてスペインに送らうとしたのに(或ひはすでに送つてゐるかも知れぬ)政府は取締らうと

しないのである。さらに佛國の同盟國たるソヴイエト・ロシヤは如何、革命前よりスペインに供給する石油の賣上高のうち二割五分をスペインにとゞめ、ストライキの基金や宣傳費を補助しつゝあつた事實は相當知られてゐたが、革命勃發後はその力の入れ方は一層熱心で、モスクワから毎夜スペイン語をもつて同志に放送し、激勵やら革命戰術のレッスンやら懇切を極めた指導に當つてゐるほかに(放送の文句はもとより英獨佛とも傍受し發表されてゐる)勞働者から盛んに寄附金を募集してゐる、總額百五十萬ポンドの豫定で既に一部は送られてゐるといふ。これでは佛國政府が如何に聲をからして不干渉主義を提唱しても、獨伊など默つてゐるはずがないが、露國政府がスペイン援助は勞働組合の所爲である等辯じても、それにどれだけの價値があらうか。イタリーの如きはさうした事由がなくともスペインの革命軍を援けたいのであつて、革命とゝもに軍用機廿臺をフランコ將軍に提供しようとし、先發の六臺中三臺はアルジエリヤに不時着、積載品が機關銃であつたことが發覺した。佛國は大に驚き英國とイタリーを說くことます〳〵急となつた、英は佛とともに、世界の金持で、最も恐るゝところは喧嘩である。かくて英佛は伊に說きさらに獨に說き、最近に至つて獨伊の原則的贊成を得たといふこと

であるが、ともに不干渉協定の成立を不可能ならしめ、または成立するも實効なからしめるだけの條件を附してゐる。そこで一種の干渉は今後繼續的にスペインに加はる譯であるが、その結果はどういふことになるか兩軍の勝敗は外援の程度によつて決せられるだらうが、それは前に述べたようなテロ時代の序曲をなすもので、テロ時代に入つて列國の干渉はます〳〵はげしくなるであらう。イベリヤ半島において何者が最後の覇を唱ふるかは、歐洲の將來に重大關係があるからである。右が勝てばドイツを包圍しようとする佛國の志望は水泡に歸し、逆に獨裁陣によつて包圍される結果とならう。もしも左が勝てば、露國は西歐を南部から脅かす地位を獲得するとともに、改めて地中海上の覇權をイタリーと爭ふことが出來るであらう。スペイン革命を機として歐洲は最後のラインアップをつくるか、ナポリ朝が亡びんとして歡樂に耽る樣を叙して、噴火口頭の舞踏と評したものがあつた。歐洲列强の踏みつゝあるステップは歡樂なくたゞ危きのみのステップではある。

スペイン内亂を繞る歐洲政局

昨年、モスクワ第三インターナショナル大會で「全左翼を結合してファッショ排擊の民衆戰線を結成すべし」といふ指令が發せられて以來、全歐洲には次第々々にファッショ對民衆戰線の對立が尖鋭化し、今日では歐洲諸國はその好むと好まざるとにかゝはらず、いづれかの陣營に分布されざるを得ないほどの急迫した形勢となつてきた。その時にこのファッショ對民衆戰線の摩擦面が遂に火を發して燃え上つたのが今回のスペイン内亂である。いはゞいまや全歐を二分せんとするかの勢にあるファッショと民衆戰線の兩陣營の各選手が、スペインの一大闘牛場裡に相見えたのである。これ故にこそこれを繞る歐洲各國は、單に觀衆の持つ興奮だけでこれを眺めてゐることは出來ないのである。ファッショ勝つか、民衆戰線勝つか、それは、形而上的には歐洲諸國各自の名譽の賭された一戰であり、形而下的には各國の利害得失に直接に響く一戰である。スペインの内亂は敢て珍らしいことではなく、年中行事とも言はれるほどで

あるが、こんどのは、その規模において稀有のものであると同時に、質的にも大に相違してゐるといはねばならぬ。即ち今日までの多くのスペイン内亂はピレネー山脈彼方の出來ごとで、歐洲諸國に影響するところは僅少であつた。ところが今回のは前述のようなわけで、歐洲諸國と緊密に結びついてゐる。スペイン内亂が歐洲諸國からの應援助力をうけて、いよ〳〵激化し、同時にスペイン内亂の動きが直ちに歐洲諸國に反映して、歐洲政局の破局を早めるといふ相互作用をなすのである。故にこのスペイン内亂を完全に把握するためには、歐洲の錯綜を極めた外交關係をまづ知り、ついで、その必然の結果としての對スペイン内亂態度を知らねばならぬのだ。

先づスペイン内亂の背景の一部をなす歐洲諸國間の關係をときほぐすことから話を進めよう。

溯ればきりがないが、年中危機に當面する歐洲が、最近において受けた最も大きなショックは、今年三月のドイツの第二次爆彈宣言——即ちロカルノ條約破毀、ライン出兵敢行である。そも〳〵歐洲の二大ファッショ國たる獨伊の間には果して密約があるのか、默契があるのか、乃至はすごい賭博打が相手の手を完全に見破るような、靈感があるのか、ともかくドイツとイ

タリーの行動は相呼應してをり、ムツソリーニ首相とヒツトラー總統は交互に舞臺にあらはれて歐洲を震駭せしめるのである。このロカルノ條約破毀の場合もその例に洩れず、イタリーのエチオピヤ征服が事實上成功して歐洲、主として英、佛がイタリーに對してグウーの音も出ずイタリーの役割が見事果されて、意氣揚々と樂屋にひつこまんとするその機會をとらへて、こんどは俺の番だとばかりに、ドイツが舞臺の正面に飛び出したのである。一說によると、ドイツはロカルノ條約破毀宣言に先づて、ローマ駐在ドイツ大使ハツセル氏をしてイタリー官邊のこれに對する意向をひいてみたところ、イタリーではドイツが問題としてゐる佛露同盟條約は、ロカルノ條約と相矛盾しない旨の見解をすでに英、佛に述べてゐるから（ドイツがロカルノ條約を破毀する根據は佛露條約がこれに矛盾するといふにある）今更解釋は變へることは出來ぬと答へたさうであるが、この時の回答がどうあらうとも、とも角ドイツのロカルノ條約破毀の直後、イタリー諸新聞は一齊に口を揃へて「もしジユネーヴでイタリーの主張が容れられねばイタリーの外交は轉換を見るかもしれぬ」（註、勿論こゝで言ふ轉換とは英、佛、伊のストレーザ戰線から身を引いてドイツ側に加擔するぞといふ意味）と言ひ出した。このイタリー

の脅迫的言辭は勢力均衡のくづれることを恐れる英、佛には十分効果を持つもので、獨伊のパツテリーぶりは鮮かといふのほかない。このドイツの條約破毀といふ事態に直面して英、佛は例によつて決定的な措置がとれず、ヒツトラー總統の廿五ケ年不可侵案に答へる佛國側提出の佛國案、ドイツに對するイーデン外相の名で出された質問書となつて現はれたが、これらはいづれも危機を遷延せしめることには役立つとしても、事態の解決には大した貢獻をしないのである、ことに英國の質問書の如きは「一體ヒツトラー總統を小學生と思ふのか」とドイツ人を怒らせてしまひ、或は愚問だと一笑にふせられてしまつて、五月七日に質問を發したのに今日に至るまで未だに回答に接しないといふ不體裁である。この間ロカルノ會議をパリ、ロンドン、ジユネーヴと轉々として開催したが、いづれも小田原評定に終始し、ドイツのロカルノ條約破毀といふ問題を解決したものはなく、漸く九月か十月ごろに英、佛、白、獨、伊の五國會議を開催しようといふことで、いさゝかの光明を見出してきた時に、突如として起つたスペイン內亂によつて事態はまた〳〵逆轉、それこそロカルノ會議どころの騷ぎでなくなつてしまつたのである。大體、歐洲の昨今においては力づくで無理押をやつたことが、そのまゝずる〳〵と既

成事實となつて無事に殘つてゆくといふところにモラールの墮落の源泉がある。たとへばドイツの第一次爆彈宣言（ヴエルサイユ條約軍事條項破毀）に驚いてストレーザ・フロントを作つたが、そのドイツの橫車はそのまゝつゝばられ、かへつてイタリーがそのストレーザ・フロントを利用して、エチオピヤ占領を敢行するといふプレミヤムがつき今度もまたドイツはラインランド占領しどく、事實上おかまひなしといふことになつてしまひさうである。

ドイツのロカルノ條約破毀後の形勢として、前記の如く獨、伊の接近が漸く注意をあつめつつあつた際にまた〳〵七月十一日に獨墺協定の發表があつて、こゝにいよ〳〵フアツショ・フロントの結成が顯著な事實となつて姿をあらはしてきた。由來、政治形態をほゞ同じくする獨伊がどうしてもよい友達になり得なかつた所以のものは實にこのオーストリヤ問題であつたのだ。即ち、ドイツは同族であるオーストリヤとの合邦（アンシユルス）を企圖し、イタリーは、ドイツにオーストリヤまで出てこられては危險千萬なので、オーストリヤの獨立絕對支持で對抗し、これが獨、伊間のわだかまりの種となつてゐた。ところが駐墺ドイツ大使フオン・パーペン氏の外交懸引が成功して、七月十一日に發表された獨墺協定となつて現はれ、永い間の獨、

伊間の確執が一應は解消することゝなつた。即ちこの協定は一般獨、墺關係の親善策を規定するとともに、明瞭にオーストリヤの獨立を認めたもので、イタリーの滿足は當時のローマの新聞紙が口を極めてこの協定を禮讃したに見ても明らかであらう。かくて獨、伊の暗默の提携成つた上は、イタリー、ハンガリー、オーストリヤ、ドイツ、ポーランドと、フアツショ國、又はフアツショ親類國は南は地中海から北はバルチック海まで歐洲を縱斷する强大な勢力となつて、隣國を脅かすに至つた。

この形勢を見てとつて最も狼狽したのは英、佛であることは言ふまでもない。英國はこのあばれものであるドイツを押へんとして、その對立物である露國に目をつけて、露國との提携にやつきとなつた。その顯著なあらはれとしては、モントルー會議において英國が露國に重大な讓步をして、露國のために地中海への出口を與へてやつたこと、英國が多大の犧牲を拂つて英露海軍協定および英國の對露借款を成立せしめたことに見得るだらう。もつともこれ等英國の對露接近は必ずしも對獨牽制そのもののみではなく、その間には露國の强大化によつて極東を脅かして日本を牽制せんとの意圖をも發見するに苦しまぬ。次に獨、伊の强大化、接近にもつ

と驚いたのは佛國である。佛國はドイツ包圍策として露國と結び、小協商國を從へ、イタリーとさへラヴアール外相の佛、伊協定を結んであらゆる努力を拂つたのであるが、佛、伊協定はいたづらにイタリーにエチオピヤといふ收穫を提供したにとゞまり、イタリーは弊履の如く佛國を捨てゝ敵陣のドイツと接近する、かくなつては、佛國としては露國との同盟をより强化して備へるより仕方がない、佛國の意のまゝに動くチエツコ、ルーマニヤを動かして、チエツコ內に露國空軍の根據地を作らしめ、露國からチエツコに至る軍用鐵道を建設するなど、その對獨包圍策は段々露骨になつてくる、ことに佛國五月の總選擧で左翼民衆戰線の壓倒的勝利を占めるに及んでは、いよ〳〵佛露の接近は目覺しいものとなり、ドイツに脅威を與へる、佛國はドイツを恐れて露國と結ぶ、ドイツは佛露同盟をおそれて、伊と接近する、それがまた相互に複作用をして對立が激化するといふ經路をたどつて、こゝに民衆戰線對フアツショの明確な二分野を作るに至つたのである。

そこへ起つたスペイン內亂である、火に油をそゝいだ傾向にあるのは不思議でない。八月十一日、露國は突如として徵兵年齡を廿一歲から十九歲に引下げることを發表して、それでなく

ても軍擴戰に脅ゆる歐洲を驚かしたが、まるで音が響に應ずるように間髪を入れずして、八月廿四日にはヒットラー總統は在營年限を一年から二年に延長する布告を出した。かくして形勢は最惡の場合を豫想しつゝ次第に深刻となつてゆくのである。

以上のような形勢にある歐洲諸國がスペイン内亂に對してどう動いたかを次に見てみよう。

スペイン内亂に對する態度を決定するのに、いさゝかも迷ふ必要のない國は獨、伊、露の三國である。七轉八倒して煩悶し――といふのが、少し強すぎるならば、少くとも複雜な駈引を必要とする國が英、佛の二大國である。

露國が民衆戰線を死守する政府側、獨伊がファッショを旗幟とする革命軍側に同情し、援助するのはあたり前のことである。八月三日、露都モスクワでは十萬の大衆を動員して、スペイン政府擁護の大デモが行はれた。このデモは勞働組合の名であつたが、政府が裏面にあることは論を俟たない。先づ第一の彼等の仕事はスペイン政府に財政的援助をすることで、彼等の一ケ月の賃銀の一割を寄贈することがほゞ決定した。全露の組合加盟勞働者二千四百萬人と見て二億ルーブルといふ巨額の資金は、かくて露國からスペイン政府につぎこまれ、革命軍征伐に

使はれるわけだ、今後必要に應じては、もちろん義勇軍の募集編成といふところまでゆくであらう。この上、露國政府と一心同體であるところの第三インタは拔目なくあらゆる方法を講じて、スペイン政府を助けてゐる。ラヂオで宣傳する、反擊の軍事的指導をする、武器を供給する等の方法が用ひられてゐる。政府軍が革命軍擊退に成功した上は、歐洲の西端に、共產主義の國が出來ることがほゞ明らかな今日、露國がかうして力コブを入れて應援するのは何の不思議もない。

獨伊兩國は、これまたかなり大つぴらに精神的に、實質的に、革命軍援助をやつてゐる。獨伊から、優秀な飛行機、飛行士が革命軍に供給され、あらゆる方法で政府軍牽制が敢行されてゐるのはかくれもなき事實で、獨、伊兩國自身、强ひてこれをかくさうとしないのだ、獨伊の意圖するところは、スペインをファアショ化して、大いにファッシズムの權威を高めるとともに、あはよくば革命軍援助の代償として、成功のあかつきは、地中海のどこか手頃のところに足だまりがほしいといふ魂膽である。獨伊ともに、向ふ意氣は强いが、いはゞ國際間ではプロレタリア領土獲得の機會は、目を皿のようにしてねらつてゐるのである。

こゝに困じ果てたのが英佛の御兩所である。英國は、持つ者の悲しさ、現狀を破壞する物音には人一倍、神經過敏で、なるべく丸くをさまるように、事なかれのお題目をとなへて、ハラハラしてゐる。政府軍が勝つて、スペインが赤化しては困る。といつて、革命軍が勝つて、獨伊の相棒が誕生し、いまでさへ相當持てあましてゐる獨伊に、この上威張られてはたまつたものでない。おまけにジブラルタルといふ英國地中海作戰の根源地が、內亂の渦中に位してゐて一歩違へば、自己防衛のためにも立たねばならぬといふ苦境にある。米國に仲裁にのり出してほしいといふ虫のいゝ考へを起して、早速あたつて見たが、アツモノにこりてゐる米國、斷じて腰をあげようとせぬ。八方ふさがりで、漫然と、何等の成算なく、佛國の提案たる不干涉案の片棒をかついでゐるといふ有樣である。

これと較べて、更にもつと苦しんでゐるのが佛國であらう。佛國の現政府は民衆戰線の內閣であるから、矢張り民衆戰線に立つスペイン政府軍を助けるのが當然のように考へられるが、さうは簡單にゆかぬ。民衆戰線のうちにも右は社會急進黨から左は共產黨まであつて、考へることが違つてゐるのだ。このために、一方では勞働組合の連中が、スペイン政府援助の資金を

集め、義勇軍を募つてゐると、一方では佛國政府は「不干涉案」といふものを作つてスペインのことはスペインにまかせて、紛爭を國際的に擴大さしてはならぬといつてゐるのだ、一方ではデルボス外相が、佛國の絕對中立を宣言すると、一方ではサラングロ內相が「佛國民衆がビレネーの彼方の正當の政府の勝利を祈つてゐることはかくれもない事實だ」と放言するのである。佛國のこの不統一、矛盾は、民衆戰線のなりたちから考へて異とするに足らぬ。假にスペインで、左が勝つたとすれば、佛國內の左翼は勇躍して、民衆戰線內から急進社會黨を追ひ出して內閣を更に赤化せしめることに努めるだらう。假に右が勝つたとすれば、佛國はドイツとスペインの兩フアツショ國に挾まれて、安全感は根底からくつがへり、現在も相當に潛勢力をもつ「火十字」一派の右翼フアツショは默つてゐるはずはあるまい。右するも左するも、佛國の蒙る影響は甚大である。現在のところ、佛國は不干涉案を提唱しつゝ、飛行機を提供するといふ、背馳した行動をとりつゝ、ゴマかしてゆくほか仕方がないのだ。しかし、事情がもつと切迫してくれば——そんなことは神樣にも解らない。

緩慢なる爆發

伊エ戰爭――それによる英佛伊の危險な關係の暴露。スペイン內亂――それによるファッショと民衆戰線の對立の尖鋭化。といふ風に、歷史の進展は思ひがけぬ突發事を仲介としつゝ、おもむろに第二次歐洲大戰の近きを思はせる。爆發は最早や、緩慢なるスタートを切つたのかもしれぬ。

スペイン內亂日誌抄

二月十七日

三月一日

兩回にわたる總選擧でスペイン人民戰線派大勝。

二月廿二日

左翼共和黨黨首アサーニヤ氏、新內閣組閣。

五月十日

アサーニヤ首相、大統領に選ばる。

五月十三日

キロガ氏、新內閣組織。

七月十三日

スペイン王黨首領ソテロ氏暗殺さる。

七月十七日

スペイン領モロッコ、メリラで叛亂の火蓋切らる。

七月十八日

七月十九日

△セヴイラ、サラゴツサ、パンプローナ、ラ・リネア、アルヘシラス、カディス等のスペイン本土各地でも相呼應して叛亂の火の手が上り、バレアリック群島、カナリー群島も蜂起、各地における叛軍の指揮者は左の通り。

（セヴイラ）　リヤノ將軍

（パンプローナ）　モラ將軍

（サラゴツサ）　カベリヤス將軍

（モロッコ）　フランコ將軍

またバルセロナにも叛軍が蜂起したが、同地の政府軍に撃退され、叛將コデツド將軍は降服

した。

△キロガ内閣總辭職し、バリオ氏組閣、數時間にして辭職、ヒラール氏これに代る。

七月二十日

モロッコ叛軍の一部、スペイン本土ラ・リネアに上陸、コルドヴア、アスツリヤス地方にも叛亂勃發。

七月廿一日

△サン・セバスチヤンでも叛軍蜂起。

△マラガの政府軍叛軍を鎭壓。

七月廿二日

△セヴイラ、完全に叛軍の手に歸し、ヴエラ、アルメリヤ、グラナダの諸市をも占據、ラ・リネヤ上空で政府軍との間に空中戰を展開す。

△政府軍はヒホンを奪回し、バダホス、イルン、サン・セバスチヤンの諸地を確保したが、ナヴアレ地方からは撤退の已むなきに至り、南アスツリヤス地方でもカミネロ將軍麾下の政府

軍は叛軍のため撃退された。

七月廿三日

△サン・セバスチヤンの叛軍は完全に鎭壓。

△叛軍の前衛部隊はマドリツドを去る五十マイルの地點に肉薄。

七月廿四日

△スペイン政府英佛に援助要請。

△カタロニヤ州の政府軍サラゴツサに向つて進擊。

七月廿五日

△政府軍アルバセテを占據。

△マドリツド北方のグアダラマ峠で兩軍激戰、對峙狀態つゞく。

△ヒラール首相、佛國記者との會見でサラマンカ、カセレス、ヴイツトリヤは叛軍にトレド、フエルヴア、シユーダツド・レアルは政府軍の手に歸してゐる旨を言明す。

七月廿六日

政府側、バルセロナからサラゴツサへ向つて軍隊をさらに增派、またマドリツドからもセゴヴイヤ攻擊に向ふ。

七月廿七日

△叛軍マラガに進擊。

△政府軍カルタヘナを占據。

△各國大公使館マドリツドを退去。

七月廿八日

△政府軍々艦ジブラルタル海峽嚴戒。

△フランコ將軍モロツコから叛軍を本土に空輸せる旨を言明。

七月廿九日

ブルゴスに叛軍「臨時政府」を組織、首班はカバネリヤス將軍。

七月三十日

△政府軍サラゴツサ附近で敗北。

△叛軍バダホス近傍を席卷。

七月卅一日

兩軍、グアダラマ峠で再び激戰、モラ將軍はマドリッド攻擊の鋒をサン・セバスチヤンに轉ず。

八月一日

△佛國政府スペイン内亂不干涉協定を歐洲各國へ提議す。

八月二日

△叛軍飛行機バルセロナを空襲。

△政府軍飛行機ヴアラドリッド、セゴヴイヤ等を爆擊。

△オヴエドで、叛軍と政府側勞働者義勇軍との間に激戰展開さる。

八月三日

△ドイツ主力艦ドイツチユランド號、スペイン領モロッコのスータに投錨、乘組員は叛軍司令フランコ將軍を訪問して國際的センセーションを卷き起した。

△モスクワでは勞働者が政府軍支持の大デモンストレーションを行つた。

八月四日

△英國政府佛國へ不干涉協定を原則的に受諾する旨回答。

△パリでスペイン政府援助の義勇軍、軍資金等の募集開始さる。

八月五日

△モロッコの叛軍約二千、スペイン本土アルヘシラスに上陸。

△佛國の不干涉協定に露國參加を表明。

八月六日

△バルセロナのドイツ人四名スペイン共產黨員に虐殺さる。これと前後してイタリー人二名も虐殺さる。

△露國の全聯邦勞働組合からスペイン政府援助の寄附金二百十四萬五千ルーブル送達さる。

八月七日

△獨伊共同戰線を張る氣勢を露骨に示し、チアノ伊外相のベルリン行傳はる。

八月十日

△叛軍根據地テツーアンに軍用機廿一臺到着、イタリー機との說有力。

△英佛兩國政府は不干涉協定參加方を米國にも要請す。

八月十二日

△政府軍所屬軍艦アルヘシラスを砲擊し、英、佛、亞の領事館を破壞す。

八月十三日

△叛軍メリダを陷し入れ、南北兩軍の連絡成る。

△わが矢野公使サン・セバスチヤンから佛領のサン・ジヤン・ド・ルツツへ避難。

八月十四日

△叛軍バダホス地方を占據、西部國境線を固む。

△ポルトガル、デンマーク兩國政府不干涉協定を受諾。

八月十五日

△サン・セバスチヤン、イルン、兩地を死守する政府軍と、これを攻略せんとする叛軍との間に

猛烈な爭奪戰が展開された。

△英佛間に不干涉協定正式に成立。

八月十七日

ウルグワイ政府スペイン內亂共同調停案を中南米諸國に提議。

八月十九日

△スペイン政府軍軍艦カディス沖でドイツ商船カメルン號を臨檢。

八月二十日

△ドイツ政府、カメルン號臨檢事件につきスペイン政府へ强硬抗議を突きつけるとともに佛國政府へはイタリー政府と連名でスペインにおいて赤色政府の存在を默視し得ない旨を通告。同時に軍艦七隻をさらにスペイン近海へ增派す。

△米國政府、ウルグワイの調停案を拒否。

八月廿一日

△イタリー政府、スペイン內亂不干涉協定を受諾。

△イルン、サン・セバスチヤンの爭奪戰つゞく。

八月廿二日

△叛軍飛行機マドリツドおよびマラガを空襲。

八月廿四日

△ドイツ政府不干涉案を受諾し、スペイン向武器禁輸を約す。

△叛軍飛行機イルンを空爆。

△政府軍飛行機オヴイエドを空襲。

不許複製

昭和十一年九月三日印刷
昭和十一年九月八日發行

大阪毎日新聞社編

發行兼印刷人　大阪府豐能郡箕面村字牧落西七四ノ二　石原博

印刷所　大阪市北區堂島上二丁目三六　株式會社大阪毎日新聞社

發行所　大阪市北區堂島上二丁目三六　大阪毎日新聞社

同　東京市麹町區有樂町一丁目一一　東京日日新聞社

歐洲の危機を孕む

スペインの内亂

第二次世界大戰一歩前

定價十錢

本社の定期刊行物

日刊　大阪毎日新聞
日刊　大阪毎日　英文東京日日
週刊　サンデー毎日
週刊　點字「大阪毎日」
旬刊　経済雑誌　エコノミスト
週三回　寫眞特報「大阪毎日」
月刊　ホーム・ライフ
月刊　映畫教育
月刊　新興婦人
月刊　大海コドモ
日刊

終